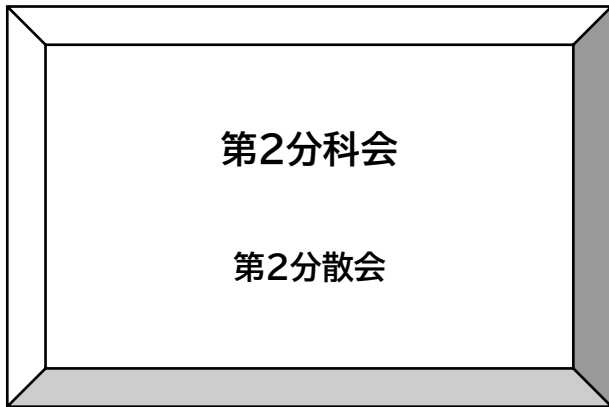




I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。初めに、協力者から次のように呼び掛けられた。「人権課題の学習では、『被差別の立場の子どもを中心に置くこと』『生活と融合した学習にすること』『仲間づくりの課題と重ねて行うこと』の三点が重要である。自主活動の取組は、卒業までに完結するという性質のものではなく、これからの長い人生をともに生きていくための基盤づくりである。自分のくらしや周りとの関係を見つめ、自分がくらしの中で抱えるしんどいことを出し合いながら気持ちを重ね合い、共に生きる仲間とつながり合っていく営みが大切である。本分散会では、参加者一人ひとりの実践や経験を重ね合い、全ての人が部落問題をはじめとする人権問題を「自分事」として捉え、その解決に向けた具体的な討議が進められることを期待する。」この後、討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－⑧

差別をなくすために～つながりの中で深まる人権学習～(大阪府人連)

－主な質疑と意見－

三重 「つながり」のため意図した取組について教えてほしい。

報告者 本校では子ども一人ひとりの声をできるだけ多く聞き取れることを大事にしている。具体的には、教室に複数の教員が入るようにしている。また、本校で重きを置いている「クラスミーティング」の際には個別の面談を行っている。その声を人権学習にも取り入れている。誰がどんな発言をしていたか、誰と誰をつなぐといいかについては、子どもの班長会議の中での声や、教室に入っている先生たちと子どもの声をもとに打合せを密にしている。

大阪 ①A の変容には人権サークルでの活動が大きく影響したと思う。具体的に活動内容を教えてほしい。②A は学習後、みんなはどうするのかということを気にしていたが、報告者から見た周囲の

変容が知りたい。

報告者 ①人権サークルの活動は学年単位のものも学校全体のものもある。今やっている活動として、出会い学習がきっかけでケニアの学校への寄付を行っている。ペットボトルキャップを回収しお金を換え、それをワクチンに変えて寄付したり、本校に設置されている自動販売機の半分の募金型にし、集まったお金を寄付したりしている。ペットボトルキャップ回収の活動は、近隣の小学校・保育園に広がっている。また地域の人権プラザにも回収箱を設置するようになった。他には、学校をよくしたいということで、塗装の剥がれを修復したり、明るい色に塗り直したりした。人権サークルの活動は学校、地域をよりよくするためには何ができるかを子どもたちが考えたものである。②周囲の変容について、私が行った初めての部落問題学習は大失敗で、子どもたちがどんどん沈んでいき、それに焦ってしまってまた空回り、他の先生にフォローしてもらわなくてはならないというほどであった。その学習の後 A に「おもしろくしうや」と言われてその言葉が刺さった。自分自身の本気度が上がった。教員が前に立つのではなく、子どもが前に立つ、子どもの意見を前に出す方が子どもの顔が上がる学習になると思うし、子どもの学びの熱量も上がっていると感じる。

福岡 A の家族との関わり、具体的にどんな話をしているかについて教えてほしい。

香川 関連して、「差別はなくなる」という父に対してどんな返しをしているか教えてほしい。

報告者 A が1年生のとき、父は「やっても変わらないからしないでほしい」と言ったが、A の地域活動等について、こまめに報告をしていたと聞いている。A は地域活動を通して、自分の住んでいる町は人にやさしくつくられていることを知っていった。学校と家庭との信頼関係を構築していったからだと思うが、2年生になって家庭訪問へ行ったときには「やって！やって！」という態度であった。A の保護者の思いを聞くことで自分自身の部落問題に対する姿勢を変えていった。あるとき A に「活動に関して家でなんて言われてる？」と聞くと「好きにしたらいいと言われている」とのことであった。楽器を運ぶ手伝いをしている保護者の姿から、私は A の背中を押しているように感じている。A の変容が、保護者の部落問題との出会い直しになっているのではないか。保護者の思いを聞く中で、私の中では「しっかり学ばなければいけない」という思いが強くなっていったので、「学んだって意味ないやん」という A に対して「今でなく、しっかり学んだ後に判断したらいいやん。しっかり学ぼうや」と伝えている。学べば学ぶほど、いまま差別が解消されていないことから「なくならん」という思いが生じてしまうこと、当事者にしんどい思いを抱かせてしまうことに理不尽さを感じる。今すぐに解決できることではないが、あきらめたら変わらないので、自分にできることをやっていきたいし、A にもそんなこと

を伝えている。一人でできないこともみんなとやればできるやんということも伝えている。

三重 ①父の発言の背景を知りたい。その背景がAとの関わりにつながると思う。②「くらしでつながる」とあるが具体を知りたい。③報告者が思う「つながり」とはどんなものか。

報告者 ①Aの父には正直、迫り切れなかった。母は「父ちゃんが1番知ってるんやで」と言っている。たくさん学んだのになくならないと思っているのではない。活動するAの背中を押している父と母の姿から、差別が残ってもよいとは決して思っていないだろう。なくすために何ができるかを考えた末の「なくならん」という言葉だと思う。②AとBは学校では一緒にいることはないが、休日、放課後は一緒にいることが多いようである。幼稚園が一緒に、当時は互いの家に行き遊び等、家族ぐるみの仲であったということもあるのかなと思う。いざこざがあっても穏やかというか深いところにつながっているように見える。③中学だけでなく卒業後もつながる仲間をつくってほしいと思っていた。しんどくなったとき、しんどいことを言える、支えることができることが「つながり」と思っている。

三重 ①Aの変容に大きく影響したと思われることは、Bの部落問題への姿勢だろう。Bが学びたい理由やきっかけを知りたい。②学校が部落問題にどう向き合っていくかには、地域の差別の現状からスタートすると思うので、地域の現状を知りたい。

報告者 ①Bが学ばなければいけないと思うようになったのは、家で部落問題に関する話題が出たのがきっかけと言っている。どんな話題だったか具体的には聞いていない。②うちの地域はいま裁判で戦っている。そこに関わっている弁護士の講演では、裁判官が部落問題に関する知識がもっとあれば結果が変わったのではないかという話があった。教育の大切さを改めて確認したところである。また、インターネット上の情報に不安を抱えているという相談が多いと聞いている。3年生ではネット上にある差別を見抜く力をつける学習をしたいと思っている。

滋賀 以前隣保館に勤務していた時、部落問題学習を進めていくことについて、地域全て1軒1軒伝えに回ったことがある。大半が「やめてくれ」という意見だったが進めたという経験がある。ともに部落問題を考えていく土台が学校や地域にあることがうらやましい。土台作りはどうしているのか。

報告者 地域と連携して進めていくことが多い。地域の中学校が頑張してほしいという期待、熱量を感じる。自分はまだまだそこまでの意識に至れていないのではと感じる。今までの担当者が関係を作ってくれていて、自分はまだそれに乗っかっているだけだが、自分もつながっていかねばならないと感じている。自分から能動的にいろんなところとつながって、思いも聞いて学校で何ができるかを考えていこうと思う。

熊本 ①うちの地域では学習会は、教育委員会が

やっているものと、ムラの子が中心のものと2本立てでやっている。人権サークルとは学習会なのか。②加配の立場なのか。③今後、学校と地域の学習会との連携はどのようにしているのか。公開授業はされているのか。

報告者 ①人権サークルは中学校の活動で、地域活動は全く別の活動である。地域活動は学習支援を中心に行っている。以前はムラの子たちが集まる学習会があったがなくなった。今の支援員はその学習会をやりたい、残したいという思いでやっている。②③人担は授業がなく、学年にも所属していない。中学校区の人担が月1回会議を持っている。中学校区で互いに公開授業を行っている。先日は南河内全体でも公開研を行った。「一中は南河内を引っ張っていかなあかん」という言葉ももらい、南河内から発信できたらと思う。

熊本 お父さんの言葉も、なかなか思うようにならなかった解放同盟の支部員の言葉かなとも思った。「寝た子を起こすな」の意識の中にいたムラの人かなと思う。

－報告2－⑤

「学習会には行きたいんです」（熊本県人教）

－主な質疑と意見－

徳島 先生が関わりをもって子どもが元気になっていくことに感動する一方で、高校という場所で子どもが泣いてしまうような指導を行ったときに、周りにいた先生は、その場面を見て何も思わなかったはずはないと思うが、レポートから読み取れなかった。この文面だけだと、冷たい印象を受ける。書かれていないことがあれば教えてほしい。

香川 この文面では私も冷たく感じる。本人は「一旦置いといておくれ」と申し出があったと言っているが、学校外では村田さんからの関わりやアクションがあったのではないと思うがどうか。

報告者 進路指導室での指導場面であった。そこはコの字型に机が置いてあり、子どもを囲むような形になったことが子どもにプレッシャーをかける一因になったと思う。その中で、指導した先生以外の先生たちは自分の仕事をしていた。指導の方法も進路指導室で統一してあるので、その通り行ったようだ。このことを子どもから聞き出すまで時間がかかった。副担任からの報告で知ったので、そこから動きが始まった。「置いておいてくれ」と言われたことについては、子どもの意思と信頼関係を一番に考えていたので、それを尊重したが、学校に来られない状況でもあったので、家庭訪問をしてつながりが切れないように動いた。子どもが自分でどうにかしたいという意思を感じていたので、那々に寄り添う形で副担任、担任につないだ。指導した先生にはアプローチできていない。

福岡 本人は「自分のきつい思いを語る場があってよかった」と言っているが、南部ブロック(南ブ)の集いや学習会の中で、今回きつい思いをしたこと

を語ったことはあったか。

報告者 学習会で話したいと言ってきたので、準備はしていたが、最初は皆の前で語ることができなかった。自分自身にも非があることもわかっていながらも、かけられた言葉に対するきつさをどう伝えていいかわからない様子だった。時間はかかったが、最終的には何があったかを語ることはできた。他にも同じような指導を受けた子たちとは指導のされ方について話をしていた。担任には話しておらず、副担任に話していた。

熊本 南ブや学習会に関わる中で、この子は南ブで自分の思いを綴り、報告をしている。そこでは南ブの会長として「先輩たちの思いをつなぐ」中で、きつかったことも語ることができていた。村田さんはこの子の自立をしていく姿を支えていたと感じている。

福岡 「子どもが立ち直ると信じていた」と言っているが、体調まで崩した子どもが目の前にいた。そこまでして受けないといけなかった差別が目前にある中で、指導をした先生に何もアクションを起こしていないことはどういうことなんだと怒りを感じる。差別を受けた子どもたちが、それを跳ね除けプラスの力に変えていくのが自主活動ではあるが、大前提として、周りにいた大人の動きが全然見えない。当事者の先生はどう思っていたのだろう。原因を作った大人や学校の在り方を話した方がいい。

報告者 当事者には担任を通じて話をした。本人は今まで指導してきたように指導してきたが、子ども本人もそれを望んでいなかったので伝え合うような場面は作らなかった。

熊本 この報告では、学校の在り方や先生の立ち位置など多くの意見があるが、大切にしたいのは子どもが声をあげられる場所を学校と行政と地域とで作っていくことだと思っている。

報告者 南ブの活動や学習会で子どもにたくさんのがなかができていった。子どもの姿も最初の頃よりずいぶん変わってきていて、卒業した今も OBとして会に参加し、後輩にも自分が支えてもらった思いをつないでいくために、つながりを持続けている。

－報告3－⑦

一人一人が人権劇を受け継ぐ中で(徳島県人教)

－主な質疑と意見－

福岡 私も演劇部を指導している。その人を演じる疑似体験はいい学びになっているのではないかと。差別する側、される側、感性が鋭いなら、しんどくならないか。部落差別、性的マイノリティ、障がい者など、当事者の子どもへの配慮はどうか。

熊本 私も人権劇で差別教師を演じたことがあるが、ムラはあるのか。ムラの方、トランスジェンダーの方の思いを聞き取るなど、教職員や子どもの学びをどうしているのか。

報告者 脚本で、被害者と加害者の関係にならない

ようなセリフを考えている。最近の取組では、LGBTQ+や災害弱者の方に講師として来ていただき、直接話を聞き、劇を見ていただいた。その後も当事者の方と関わる学びの流れとなっている。

徳島(福井町) 人権劇に40年関わっている。当初、同和問題を扱う劇を作るとき、地域の方や教育集会所長や同和教育主事で内容を考えるときストレートにいくことを確認した。例えば解放令の場面でのセリフでは、賤称語を使うこともあった。ムラの子が被差別の立場を演じることもあった。立場を自覚した上で、子どもも保護者も納得して行った。劇を演じるに当たり、加害の立場では差別する側の気持ち、被害者の立場では差別される側の気持ちを体感し、劇を見る側では差別への怒りを感じる、心に訴えるところが人権劇の学びだと思う。

徳島(福井中) ムラはあるが、全校19名なので、学習会は全生徒に呼び掛けて行っている。人権劇の取組は9月10月を重点的に行き、夏休み中にテーマに詳しい専門家に来ていただいたの講演会、ワークショップ等を行っている。私は10年前、担任として30作目に関わったが、第1作に出演した卒業生を招いて、人権劇を始めた経緯や思いを聞き、子どもにおろして取り組んでいった。

熊本 宇城市では5町が合併し、5か年計画で徳島の先生方と連携して講演会を行っている。今年は森口先生に来ていただき、自分の生い立ちや人権劇をDVDにまとめて紹介された。人権劇でムラの子どもや親に勇気をもらっている。ムラとのタイアップが必要ではないか。させられていないか。うちの支部では小4で立場宣言を行うが、中2で本音を聞く機会があった。人権劇で自分を出した子が、卒業して、自立できているか、どう伝えているのか。

徳島 10年前、福井中で人権主事をしていた。先ほどの1作目の卒業生は、教員となって、他校で人権劇に取り組んでいる、いじめ役で出演した生徒は、人のために役に立ちたいと大きな病院の看護師になっている。人権劇を始めた先生は、「先生はどれだけ生徒を見ているか、どんな配役でどんな脚本でどういうふうに子どもたちを育てられるか必ず見える。だから脚本には必ず教員が関われよ」と言っていた。生徒を見ていて、そこに同和問題、いじめ、LGBTQなど、目の前の課題に向き合う人権劇となる。そこに学校外の地域の方々が関わっていくのは当然のことで、そこで子どもたちが育っていく、これが40年の取組だと思う。現在は、親も親のきょうだいもみんな人権劇の経験者なので、教員以上にバックアップしてくれる。

香川 中学校で部落差別を学習する中で、結婚差別を学習した後に宿題を出している。「もし私が被差別部落の人と結婚することになったら、お父さん、お母さんは賛成してくれる？」を聞いてくるという宿題を続けている。当事者と教員と話し合い、この宿題はやらないといけないと毎年続けている。生徒たちはうちの親は賛成してくれるという気持ちでいるので、どうしても賛成してくれなかったとか、

一番身近な信頼している人が差別をする立場だったとわかったときの生徒のショックが大きい。それを教室に持ち帰って、どうしたらいいか語り合う学習をしいる。今年、その話を隣保館の職員の方と時間をかけて話し合う中で、当事者の方から心が重くなると言われた。「もし自分が被差別部落の人と結婚することになったらどうする」というのは、被差別部落当事者にとってかなりきつくて心が重くなるということに、今年になって、新たに気付いた。人権劇で、劇を演じるときに、当事者の方はかなりつらかったのではないかなと思う。今年、話をした人と、これからもっともっと話をしていこうと思っている。

徳島 人権劇には若い教員の頃からずっと関わって、その実践に学ばせてもらった。当事者として、結婚問題についても、40年前はかなり厳しい差別があった。差別と闘って差別を乗り越えて、妻の母も最後には「差別が憎い。こんな差別がなかったらお父ちゃんが生きている間にお前らを結婚させることができたのに」と、母親が変わった。差別というのは、当事者が被差別の立場で不幸かということ加害者も不幸であるということを書いたかった。私の娘が結婚のときは、「カミングアウトはしないでもいいよ」と言っている。なぜなら、今は差別しない人がたくさんいる。言う必要もない。仮にもしそういう考えだったら闘うという話もしている。批判するつもりではないが、当事者の中でも結婚問題についてはいろいろな考えがあって、「当事者であるから結婚はどうする」という問いには、当事者もいろいろな考えがあり、多様に考えてもらえたらありがたいと思う。私は、幸せに暮らしている。

報告者 福井中学校のこれまでの人権劇のシナリオをまとめて冊子にしているので、手に取ってみてもらえたらと思い、紹介する。

－報告4－④

「先生、諦めたらだめですよ！絶対私みたいなのがいますから！」～あせらず、諦めず、たゆまず、種を蒔いていこう～(福岡県同教)

－主な質疑と意見－

報告者 昨日であれば朝文研の子が参加して発言してくれるはずだったが、修学支援担当の先生方がたくさん応援に来てくれている。説明の足りない部分を補足してもらう。

福岡 修学支援 3 年目。本校生徒も朝文研で活動しているし、外国にルーツを持つ生徒がたくさんいる。今関わっている韓国籍の子は活発な子で、楽しく活動できている。生まれは韓国で幼いころ日本にきたニューカマーの生徒。しかし、具体的な差別の話まではできていない。初めて関わった子から「小さいころ病院に行ったとき、本名で呼ばれて周りの目が気になった。カルテも本名だったり通称名だったりのごちゃまぜになっていた」と話してくれ

た。でもきちんとした返しができなかった。朝文研との関わりは教員にとっても学びになる。この輪が広がってほしい。

熊本 Aがウリ文化祭に参加したとき、みんなが堂々としていて「これでいい」と思ったのはなぜか。AはなぜCには自分のことを話せたのか。

報告者 Aにはずっと隠しているつらさがあった。隠しているのがダメなんだと思っていた。文化祭でいろいろな考えの人がいるとわかりこれでいいと思えた。それが、信頼できるCに話すことにつながった。Cは一番仲が良い生徒。卒業後、Aに日本人の彼ができて、自分のことを話すべきかの相談もCにしていた。

熊本 Aの 2 回目の就職試験の際に企業に「在日」であることを申し入れをしたということだが、なぜ申し入れるのか。

福岡 何も言わずに就職しても住民票の提出などでバレてしまう。福岡県の取組として最初にきちんと「在日」であることを伝え、企業側に配慮してもらおうと考えた。賛否はある。申し入れをするのは「在日」の子だけでなく、障がいや病気を抱えている子も同様の取り組みをしている。企業は今、欠席の理由を聞けないので、欠席の多い子については「1年生のときは家庭事情で欠席が多かったです、もう大丈夫です。就職後もやっていきます」などの申し入れをする事例もある。

報告者 配慮だけでなく、相手先の偏見をとり除き「この子自身をちゃんと見てください」という思いを伝えていく場でもある。差別選考につながるようにあらかじめ、企業と学校で話をしておく意味もある。Aの1回目の試験の時にはこのような説明ができていなかった。

福岡 30年前、中学校1年生の子が朝文研に参加していた。その子はとても荒れていたが、朝文研やウリ文化祭に参加することで、顔つきが変わっていった。今も私と一緒に飲みに行く仲である。地元は産炭地で在日の子は多く、保護者の意見は大きく2つに分かれる。「うちは私が話していきますから大丈夫です」という家庭と「一切関わらないでください」という家庭。後者にどう働きかけていくかが課題。中学校との連携、中学校への働きかけはどのようにしているのか。

報告者 朝文研は高校の教員がしているので、中学生の参加はないし、中学生への働きかけもない。しかし、この活動とは別に青年がやっている活動では中高のつながりがある。朝文研でも一緒にやっていけたらと思う。兄弟がいるからと朝文研に入ってくれる子もいたが、一度つながりが途切れると厳しい。今まで中学校から「在日」の子の情報は上がってきていなかった。これから中学校とも連携をしていきたい。

熊本 母が小倉生まれで、空襲で熊本に疎開した。もう亡くなったが、生前に皿倉山の実家があった場所に連れて行ってあげた。その時に八幡製鉄所のそばにあった「在日」の部落の話をしてくれた。

「そこでいっぱい人が亡くなったとね」と話してくれた。私はムラの父ちゃんとして「在日」の方との交流もしている。部落は部落差別解消推進法もできてある程度かたちができてきた。「在日」の方の問題や、中国人や台湾などの外国人労働者の問題など先生方のこれからの頑張りが必要だと思う。中学生や小学生にも問題を抱えている子がいるはず。ぜひ連携してほしい。「私が我慢すればよか」などという子がいなくなるように頑張してほしい。

報告者 私たちにまだまだ足りないところはあるが、逆にまだやれることがいっぱいあるということ。小中学校との連携もしていきたい。

福岡 修学支援2年目。高校時代にカミングアウトを受けたことがある。大人になって聞くより高校時代に聞いた方が衝撃が大きかったと思う。一つ下の男の子に「ぼく日本人とは付き合えないんですよ。実は日本人ではないです」と言われた。同じ高校生で、お付き合いする人が限られているとか、将来結婚できないなどの話をされて衝撃を受け、無神経にも「帰化しないの」と聞いてしまった。「自分はいいいんだけど親とかおじいちゃんおばあちゃんが悲しむかな。ゆくゆくは同じ境遇の人と結婚することになると思う」と言われた。この出会いは衝撃で今も心に残っている。今この活動をするようになって、その子が朝文研活動をしていたことを知った。当時はその活動すら知らなかったが、大人になって理解できた。今の生徒と朝文研活動をする際も、あの時の衝撃を忘れないようにしたい。今はいろいろな生徒がいて悩みもさまざまである。日本名(通称名)でいる子は、いつか本名に変えるのか変えずにいくのかという問題がある。ルーツは朝鮮にあって家族で国籍が違う生徒もいる。今はK-POPの人气があって、本名を名乗ると「かっこいいやん」と言われることも多くなったようだが、この先差別を受けずにいけるかはわからない。最近、同じ高校の先生からカミングアウトを受けた。「父が韓国籍で、このままでは自分も韓国籍になるので、母の日本籍に入るため父と母は結婚しなかった。もし韓国籍だったら市の学校教員になれなかった」と言われた。身近なところに見えていない隠れた差別がある。このようなところを忘れずに生きていきたい。

Ⅲ 総括討論

(1日目)

熊本 自分にとっての自主活動として、10年ほど前に南づに参加をしている。夏季と冬季集会では、生徒がレポートを持ち寄る。生徒たちは、自分のくらしや親の姿を綴っていく。その綴りを聞いた生徒や教師が、一人の人間として、自分の思いや自分のことや自分の親のことを語っていく。時には、生徒たちから大人に向けて「なぜ先生は南づに来てい

るの?」と問われたり、先生自らレポートを読み上げたり、私たちも子どもたちと自分の考えていることや思いをぶつけあっていく。南づに生徒たちがレポートを持ち寄り、お互いに励まし合い、時には突き付け合いながらも、「変えていかんといかんよね」とそれぞれの地区や学校に帰っていく姿があった。「学習会には行きたいんです」と言う那々さん、村田先生は学習会の中でどんな話をしているのか、子どもたちの思いを聞いているのか、自分のくらしなどを話しているのか教えてほしい。

報告者(熊本) 自分も学習会の中で、教員になる前の社会人の時の話や家庭内で起こったことなどの話をしている。学習会に参加している子どもたちは優しい子が多いので、反応としては励ましやすごいねという気持ちで聞いている。私自身、自分のきつかったことをいくつか話して共感を得ていると思う。いくつかは自己開示をしている。学習会の意味について、学習会を受け持つに当たり、教科学習会、塾のように思っていたが、徐々に本来の学習会の意図に沿うようになりつつあると思う。小中高の連携ができていて、学習会に来る意図が小中の中で分かっている。高校生になって、その意図が分かった上で学習会に来て、そのよさを伝えていくのが私の役目だと思う。

福岡 那々さんが強く生きられた学習会や南づだったのは村田先生のかかわりがあったからだと思う。担任の先生に相談がなかったのが引がかかる。進路指導の先生はこれまでもこんな指導をしてきたということは、卒業生の中にもきつい思いをした生徒がいたのではないかと、那々さんが声を上げなかったらそれをキャッチできていなかったのではないかと。みんなで子どもたちの声をキャッチしていこうという立場で発言した。

大分 24年前、同和教育推進教員として、全同教で発表してからずっと部落の人たちに関わり続けている。なぜ部落に関わり続けるのか、運動体の人たちが疑問に思う、それが自分にとって部落と出会った意味だと思う。2本のレポートを聞いて、仲間づくりとか、つながりとか、地区を語るとか、同和教育が大切にしてきた実践がたくさん見られた。私がかつて「人権のまちづくり」で発表したときに、司会者・コーディネーターの方に「半径5m以内の確かなつながりをつくりましょう。その延長上に人権のまちづくりがある」と言われた。そのとき、自分ができることを、身近なところでやり続けられたいとわかった。差別をなくす状況5項目「しんどいときはしんどいって言うていい」「そんな人のことに気付こう」「気づいたらほっとかないで一緒になくそう」「頼ったり頼られたり相談したり相談されたりしよう」・・・は、その子も周りの子の生きづらさも解消されていく営みだ。部落差別をなくす取組は、

あらゆる差別をなくす、私も周りも差別をなくす状況を作る、その営みをやり続けることが大切だ。2つの報告は、地域と行政と学校と運動体が、その歴史を継承する人たちがいるということと、次の世代に受け継いでいる、こんな地域をつくりたい。

大阪 田中先生と同じ中学校に勤務している。地域での学習会で、地域で育った青年が自分の体験を語るという機会があって、その体験を聞いた後、地域の子どもがその青年に「私もこれから先同じような差別を受けるんですか？」という質問をした。そのとき私は先輩の同担と呼ばれて、「今のこの子の思いをお前はどう思ったんか？」と言われた。そのとき、自分が思いもよらない、これから先差別を受けるかもしれないという思いを抱えて生活していくという、その子の思いに気付かされた。差別のない、差別を許さない学校、地域をつくっていくことでは、先輩から後輩に、そんなふうに思いをつないできているんだなと思った。私は差別というものはつながりを絶つもので、それと闘うために、同担としてつながりをつくっていかなければならないとずっと思ってきた。地域に出かけて、地域の方と差別をなくすためにどうしたらいいか話をして先生とつなげる、幼稚園や小学校にもいっぱい行ってつながっていくことが差別をなくしていく一歩だということを信念にずっと取り組んできた。そのつながりを私で終わってしまうのではなくて、先生や子どもにつないでいこうという思いで活動してきた。つながっていくことで差別をなくせると思うし、子どもたちが行動することで変わってきたと思うので、この思いを後輩に伝えていきたい。

大分 高校生の学習会に参加している。子どもが減り、20年前は地区の親世代が、地区の子どもに差別に負けないよう力をつける意味で活動していたが、今は、地区の子が少なく、あるいはいなくて、全校に呼び掛けて集めて、部落差別を含めた人権について学習している状況だ。高校きずな学習会は市が主催で、高校の先生が指導しているところ、地域の指導員が自分の子どもたちを教えていくところなどさまざま。私が参加しているところは参加者が9名で、県人教の事務局長が月1回テーマを与えて勉強していくという形をとっている。学習会の運営のしかた、生徒のニーズ、頻度、題材をどうやって選んでいるかなど教えてほしい。

報告者(熊本) 小中はふれあい学習会の中で、市の職員の方が主に指導する思いやり学習会と教員が主体となって行うきずな学習会がある。小中については週2回、高は週1回水曜日のきずな学習会だけ19時～20時半くらいまで行っている。内容は、小中高と宇城市、支部長とのプロジェクト会議で検討して、1年間のスケジュールをたてる。原案は市の職員と教員が作る。運営は講師登録をしている私ともう一人の教員で行っている。オブザーバーとして他の市からの人権推進の先生がボランティアとして参加することもある。OBも来ている。
熊本 ムラの子がムラの子であるというのをなかなか

か出せない状況だが、今年は母親が1年生の子どもに語り、ムラを意識した上で参加している子がいる。課題としては、ムラを有する学校の先生たちが、ムラの子だと言ったことがなかなかできない状況だ。だからこそ、行政、学校、支部の連携が大事だ。

熊本 14年前にこの小学校で7年間勤務した。当時小学校3年生担任として学習会にかかわった。担当者が工夫を凝らして学習を行い、学習をがんばる子が自分のクラスにもいて、クラスにその学習の様子を伝えようとするが、他の子はムラのあるコミュニティセンター(コミセン)がある場所もわからない状況だったので、話題が盛り上がらなかった。秋に人権学習の公開授業を行うので、一連の学習の流れの中で、小学校3年生は「センターができた」という熊本県地域教材を使って、うちにもコミセンがあるという学習をして、みんなでコミセンに行って学習会のことを担当者に直接聞くということをはじめた。ムラに行ったことのない子どもが0になるという目的もあり、学習会でこんな学習をしているということ、行かない子どもも理解するという場を作った。大人になって部落差別を否定する大きな材料になる。今担当している学習会に小学生は、行政と学校の2つの学習会を合わせると45人ほど、中学生が15人ほど来ていて、学習会が始まった場所の探検とか、ゼッケン登校や狭山事件も、子どもたちは自然に知ることになる。ムラの子もそうでない子も、中学生になると熊本では狭山集会があって、市のバスを使って小中学生の希望者を連れて行く。集会に参加して学習するだけでなくデモ行進で行動していくこと、再審、冤罪の意味、石川さんという人について、実際に行動を通して学ぶ機会を作っている。人権に関する市民意識調査の課題でも、青年期にどうつなげるかが大事なことになっていて、村田先生が高校でこのようにつないでいることはとてもありがたいことだ。今学んでいる子どもたちが高校生になって南ブに入るための私たちの支援として、コミセンに中高生に泊まってもらって、1時間半だけ学習会をして、あとは好きなように時間を使ってもらっている。今年は10月初めに中学生が13人くらい、高校生が4人くらい参加して、高校生たちが南ブの様子、なぜ南ブに参加しているかという思いを語ってもらっている。大学生のOBも3人来て、そんなつながりの中で、差別をなくすという営みをつなげることを目指している。

大阪 以前富田林第一中学校で働いていて、忘れられないのが生徒Bのことで、「部落問題学習を人権サークルでしたい」と言ったこともすごく覚えている。1年生の終わり頃、自分たちの今抱えているしんどさや思いを出し合う機会があった。終わった後、Bが残ってすごく言いにくそうに震える声で、「家で差別的な言動を見聞きした。自分自身本当に差別は怖いと思った。それに対して自分に何ができるのか何が言えるのかまだまだ自信がないし、ぼんやりとしかわかっていないからもっとみんなと

勉強したい」と言った。そして次のサークルのときに B が提案したら、みんな賛成した。B を突き動かしたのは差別の現実だった。それはおかしいと思った B が一歩踏み出そうと思って動いて、仲間といっしょに何とかしよう、勉強することで力をつけようと思った。子どもは私の知らないところでつながっていたし、何かをするとき仲間と一緒につながってしようと思っている。私も子どもたちとずっとつながっていようと思えるようになった。この子たちが卒業して自分も学校現場を離れて何かできることはないかと考えたときに、つらいことやしんどいことがあったときにいつでも帰って来られる場所を大事にしたい。高校で人権サークルを立ち上げた生徒が新しく周りの生徒とつながっていくということが、今までつながってきたことの延長線上にあると思う。

(2日目)

福岡 「帰化」という言葉について補足の説明をする。福岡県高同教では、中心になる国があってその国に属するという意味合いがあるので、差別する側であった私たちが「帰化」という言葉を使うのはよくないと捉えている。私たちがどちらの立場に立つのかということを考えていかなければいけない。朝文研の10代後半の子どもたちが、自分の結婚相手について、真剣に考えて、家族や親の思いを受け止めて、差別にあうかもしれないという不安と向き合っている場面に出会って衝撃を受けた。自分の学校はその子のルーツを全く把握できていなかったが、他の学校の幼馴染に誘われて高校3年生で朝文研に来た子がいる。ウリ文化祭に参加して、いろいろな学習や発表をした帰りのフェリーの中で、「遅れてやってきた青春」と言っていた。しかし、「自分のことを学校の人に伝えるのはきつから、先生がかわりに言って」と頼まれた。2カ月くらい一緒に文章を考えて、最後の学年集会で伝えた。「自分の両親は在日で、自分の子が差別を受けるのは耐えられないと話し合って、小学校に上がる時に日本名を選択することを選んだ。その中で育ってきた」という内容を、そこにいる子たちが一生懸命聞いてくれた、その子にとってありがたかったし、自信になった。卒業後も、民族の仲間とつながりながら、新しい出会いの中で、「この子には伝えられる」と相手を見極めながら、しなやかにたくましく生きていっている。被差別の立場の子どもたちや子どもと親をつなぐ場に教員がいることはとても大切だと思ってかわり続けている。

福岡 地域の中で子育てを終え、教育対策部という立場で、学校の先生や地域の子どもの様子や親の様子を見ながら、その中で育てて見守っている。大阪の報告では、A 君のお父さんと A 君が「もうどうせ言っても変わらんやん」という発言とか、先ほどの報告にもあったおばあちゃんから「黙っていなさい」というのも共通して言えるのは、その背景にたくさんの方があって、それを聞いた周

りの人間がどれだけ想像力を働かせてその思いに寄り添えるのかということだと思う。諦めから展望に繋がっている報告だったと思う。福岡の報告では、卒業後に新しい話が聞けて、一生をかけて向き合っていく、付き合っ寄り添っていくという先生の思いに触れることができて胸が熱くなった。私は結婚差別経験者で、加差別側になる。とても苦しい思いをしながら 2 人で乗り越えてきたが、結婚差別の授業の重さを分かっている、授業するにあたって、先生方の前で自分の経験も話したこともある。当事者の声として思いを知って授業してほしいし、先生方が話を聞いて感じたことを子どもたちに伝えてくださるなら続けていこうと思う。同じ思いで涙を流さなくていい将来が子どもたちに待っているなら、今いくら泣いてもいいと思って話している。

香川 島にも部落差別があるが、子どもたちがきつと変えてくれると信じていて、結婚差別の学習もそんな思いでやっているというのを子どもたちに伝えていきたいと思っている。特に今は若い新しい先生たちにどう伝えていくかに取り組んでいる。四国で発表した若い先生は、自分のこととして考えてくれている。そんな先生がどんどん増えていったらいいと思って、いろんな取組をしている。島にはお互いの町で人権学習をどうやって進めていくか常に連携している形で、当事者の人たちの思いを汲み取りながら学習している。島外の徳島県の人権集会に参加した子どもたちがすぐに吸収してどんどん動いている姿を見ると、子どもたちが学べば絶対に差別をなくしてくれると思っている。3年間の学習を通して変わった姿を見られるのは、中学校の教員をしていて本当によかったと思う。

福岡 新採用から15年間、北九州の高校に勤めて、終わり5年間は同推教員だった。本来なら同推教員を降りた後に次の同推と一緒に地域活動して転勤をするが、家庭の事情で転勤した。その時に解放同盟の地区協議会の委員長に挨拶すると、「解放運動はどこにでもある。あんたの行ったところで頑張ってもらったらそれでいい」と言ってもらった。小郡の高校に転勤して担任を持った時に、クラスの解放奨学生が通う集会所に行った。1 年生の人権部落問題学習後の感想を聞くと、「部落は悪くないんだ、部落差別が悪いんだ。在日朝鮮人はちっとも悪くない、朝鮮人差別が悪いんだ」と言って、彼は整理していた。2 年生になって担任を外れたが、引き続き集会所に通った。地域の青年とバンドを作って友の会の新入生歓迎会をやるということになった。曲決めのときに彼が歌い出したのが「青空」。その質問教室の中で、彼が「青空」を歌い出したら、「私も好き」「俺も好き」って感じで、そこにいた高校生がみんなで大合唱になった。ものすごく素敵な場所にいさせてもらえるなというふうに感激したのを覚えている。その後、その集会所で泊まり込みの学習会を行ったが、彼は遅れてやってきた。一人一人自分のことを話すが、彼の番が回って

きた時に、今日遅れた理由を話した。彼は、他の高校や高専のプロを目指している仲間とスタジオを借りてバンドの練習をやっている。その練習の時に「勉強会がある。それで俺はバンドの練習は途中で抜ける」と言ったら、「何言ってるんだお前、このプロを目指す大事な時に」と言われた。彼はその時に初めてバンドの仲間に自分のことを語った。「自分は部落の生まれで、そのことに関する学習会を今集会所でやっている。自分はそれに参加したいんだ」と。バンドの仲間は受け止めてくれて、「大事な学習会じゃないか。行って来い」と言って送り出してくれたと、とても嬉しそうに話していた。「俺のバンドの仲間はすごいんだぞ。差別に出会わない、これが一番いいんだけど、自分もいつか差別に出会う時があるかもしれない。でも、その時に、どんなふうに対応するか、どんなふうに話して相手にわかってもらうか、それを学ぶために集会所に来ている」とも話した。私自身もなぜ集会所に来ているのか、差別があったときに、その差別はおかしいんじゃないかときちんと指摘できたり、打ち返したりできるようにするために集会所に来ている。そのときはっきりした。彼が集会所の仲間をととても大切にしていることがわかったシーンだった。

熊本 今まで解放同盟が先生方と一緒に頑張ってきたことを、SNSで覆す時代になってきた。そこに寄り添う先生、部落の方、行政の方が一番頼りだ。部落差別解消推進法の中の「人権のまちづくり」で、今やらなければいけないのは、SNSで厳しい状況で、頑張ってきた部分を取り戻すことだと思う。寄り添う仲間たちをいかに動きやすい体制を作るか、バックアップするかを学校と行政と支部と連携踏みながら進めるという部分だと思う。

熊本 一番気になったのは、結婚差別について宿題が出るという学校。先生たちは宿題の答えを聞いてどんなことをするのか。私も結婚差別にあったが、何年かして、叔母が謝ってくれた。私の親戚は全部差別者だと思っていたが、叔父たちが「何度も会う中でいつ謝るかな、連れ合いの方にもいつ謝るかなと思っていたけどなかなか言えなくて」という言葉を聞いた時に、こんな差別は早くなくさなければと思った。正しく知ること、こんな差別はよくないということをわかってくれた場面だった。そんな経験をして、我が子が結婚する時にはもう絶対こんなことが話にも出ないような世の中にしたいという意気込みをその当時持っていた。私は子どもが3人いるが、3人とも相手にはきちんと明かして結婚するということを伝えている。今の時代、言わなくても大丈夫とも思っているが、伝えて結婚する、お付き合いをする時もそのことを伝えてお付き合いを進めていくと伝えている。息子はきちんと伝えて結婚し、相手の家族が、「彼が素敵な人です。うちの娘が選んだうちの息子だ」と言ってくれている。討議の中で、韓国の人が、何も差別は聞かなかったが就職した時に差別がこれかと思ったという叫びが息子の言った差別事象に似ている。

息子たちは学習会で学習して、そしてムラの人間として自信持って胸張って生きるという学習をしてきた。大学の時アルバイトをしていた時、耳元で、オーナーが「あなたは部落ね？」と聞かれた。その時に息子がドキッとした、こんな時に来たかと思った。でもその時に息子は、「伝えればちゃんと伝わる。ちゃんと伝えてないから間違った考えをもっていった。伝えればちゃんと伝わる。人ってあたたかい人たちだよ」と私に言った。「いろんなところで話をする時には、そうやってよかったこと、正しく伝えることを、お母さん伝えてね」と言われている。私たちの地域も、差別を受けても立ち上がりを見せる、胸を張っていける、子どもたちにもその生き方を選ばせた。教育はとても大事で、立ち上がりは先生たちのおかげ。いろんなところで差別をなくす仲間たちを増やしたいという話をしている。

大分 人権学習会のサポートをしている。私も連れ合いが出身で、結婚の問題では親が差別する、それを説得できない自分の弱さというのを自覚しながら、そういったことも子どもたちに差し出しながら学習会を進めている。今日は自主活動の部分で仕掛けるということについて、子どもたちがやってくれたことを紹介する。同盟の教育対策部と連携をしながら、中学生高校生友の会というのを企画しているが、昨年隣保館に「部落は出て行って」という差別落書きが起こった。その時に中高生たちに事実を知らせ、子どもたちを地区ごとに集めて意見と感想をまとめさせた。代表的な意見が「部落の部分が自分の名前が書かれていたらどう思うか」、「大人の人はこの差別事件のことを何で隠したか」、「学校の人権学習の中で今起こっていることとして伝えて欲しい」という3つの意見だった。そして、要望書を、自分の地域の教育長や市長、学校に向けて提出することができた。自分の学校の人権学習の改善要望を、自分の言葉で教員に伝えていくようなことも、少しずつできていくようになった。また、地域の学習会の中で企画している解放文化祭の仕掛けは、地元のフィールドワークをした。今までできなかった理由は、それをするによって部落出身の子がわかる、前は立場宣言していたけど今はそれもしないから知ったら困るという地域の声もあったからだ。しかし、支部の人との話し合いの中で高校生のうちにフィールドワークをした。それから、中学校であった当時の差別事件に出会った親たちに話をしてもらった。高校生の学習会に参加している子どもたちの親なので、親の話を聞くことによって、人権学習会の中で本人も自分のことを言いやすくなった。その結果として、それをレポートに書いている。そんな取組の中で、自分を語るということを部落の子ができるようになったし、部落以外の子どもも参加しているが、自分の障がいのことをカミングアウトしたり、不登校のことをレポートの中で出していったりすることができるようになってきた。ステージの上で発表すると、言いたくないという部落の子がいる。「周

りに来ている大人を信用できないから言いたくない」と言っていたが、反対に中学校で宣言できた理由を考えさせ、小中学校からレポートを書いて人権学習で学んできたことや、周りの人たちに自分の立場について理解しながら学習会に参加する人であってほしいという願いを込めて、文化祭の発表をすることができた。子どもたち自身が今回の解放文化祭の中で、カミングアウトとはどういうことなのかをまとめていった。自分たちがカミングアウトするのは「仲間を増やすため」、「人に考えてもらいたいため」、「同じような悩みを持つ仲間を元気づけるため」立場宣言すると、自分たちなりに回答を作った。学校、部落研、朝文研にかかわる者が、お互いに差別をなくすためにつながることに気づかせる仕掛けが必要だ。

（報告者より2日間の学びについて）

報告者(福岡) レポートを書いて、最初にお世話になっている部落の青年たちに読んでもらったとき、書けば書くほど自分へのツツコミや反省が止まらなかった。あのときの自分を叱りたい気持ちはいまだに変わっていない。部落研にかかわっている先生とレポートを検討する中で、このように書けばよかったとかアドバイスをもらって、皆さんと出会うありがたい機会をいただいた。子どもたちにとっての部落研や朝文研、自分にとっては高同教だったり全人教だったり、この場で皆さんが聞いて次につないでくれると思えるから、その場があることを本当に大事にしていきたい。

報告者(徳島) 本校には子ども会があるが、12年間部落の子はいない。劇を作る中で、部落との境はないということで取り組んでいる。地域の中心の方に台本をいつも見てもらっていて、ムラとのタイアップはしっかりできている。私も、この学校で劇にかかわってきて、脚本を書いたことがあり、生徒の変容が見える大きなものだと感じている。本校は、数年以内に隣の学校と統合することが決まっていて、今あるものを新しく統合されたところでどう引き継いでいくのかというのが、これからの課題だ。是非引き継いで、新しい校区の中学生とも一緒に勉強ができていったらいいと思う。

報告者(熊本) この学習会や子どもたちがいろいろな人権の活動をしている姿を見て、レポート発表で自分のことを開示するってすごい勇気がいるが、そういう発表を何回も見て、その度に感動する。その子たちの姿を見て自分自身が勇気をもらっているところが一番大きいと思う。こういう発表をさせてもらって、自分にまだ知識があまりないので、説明も言葉が足りなくて皆さんに伝わるかどうか不安だったが、一緒に人権に取り組んでいる先輩方、地域の方、そしてこのレポートにかかわった人たちも来てくれたので、本当やってよかったなと今感じている。こういう感動を戻ってからも伝えていきたいと思っている。

報告者(大阪) A が変わっていったのを目の前で

見てきたが、自分自身が A のおかげで変わったということもすごく自分の中では大きかった。A のやってきたことや今でも頑張っているというところに、私自身は子どもたちをエンパワメントする立場だが、反対に子どもたちからエンパワメントされたと思う。自分が教師だからとか子どもとか大人とか関係なくお互いに高め合っている、一緒にやってきたことを皆さんに知ってもらうことができた。この中学校は先生たちがサポートしてくれてあたたかい学校で、ここで学んだことをここだけで終わらずに、もっと広げてやっていきたい。

（2日間のまとめ）

協力者 総括討論のなかでは、しんどい立場の子どもたちがその思いをことばにして語り、その思いを自分と重ね合わせて受け止め、真剣に返す仲間とのつながりや絆を深めること、また、ありのままの自分を語ることでできる人間関係の構築の必要性や居場所づくりの大切さが語られた。また、子どもたちが自分の力で他の子どもたちとつながろうとする力をもっていて、わたしたちが見守るなかで、まわりの人とつながり、新しい人間関係をつくる力（エンパワメント）をつける必要性も指摘された。共生社会の実現に向けて、わたしたち自身が、子どもや保護者に真剣に向き合う中で、自分の中にある人権認識を磨き、学び続けていく大切さ、立ち位置の大切さについても問われた。そして、何より人との出会い、かかわりが人を変えていく、その力、展望についても多く語られた。本大会に集ったわたしたちが、今大会で得たエネルギーを、そして課題を仲間として各地に持ち帰り、小さな革命として、明日からの実践、行動につなげていこう。